

# 女性力を強みに 変えた 「大工の娘」の挑戦

いまだに男の世界という印象が色濃い建築業界。そんな世界で華々しく活躍する有限会社ゼムケンサービス(福岡県北九州市)は、女性社員が全体の8割という建築デザイン企業だ。多様な女性のライフステージに合わせたワークシェアリングの活用により、女性の視点を強みに変えた経営手法は、女性の起用という枠を超えて、現代の雇用のあり方にも一石を投じる。

**有限会社ゼムケンサービス**  
代表取締役 **籠田淳子**

取材・文／川島路人 撮影／石橋親行

## 記事のポイント

- ワークシェアリングの実現 — 業務の見える化、何でも話せる雰囲気で“お互い様”的企業風土をつくる
- 独自の育成ツール — 「ゼムケン赤本」「ゼムケン手帳」など持ち運べるツールを活用しての人材育成
- 生活者視点の設計 — 娘、嫁、妻、母、女——。さまざまな視点から女性ならではの提案を行なう
- 大工の娘の誇り — 職人の世界に敬意を払いながら、男女それぞれの強みを生かすることで、業界の可能性を広げる

事務所壁面に設置された大きなホワイトボード前で



女は棟上げにも  
立ち入れなかつた時代に  
母の援助で建築の道へ

男の世界界という印象がいまだに根強い建築業界に、とびきり元気な女性経営者がいる。福岡県北九州市の建築デザイン企業・有限会社ゼムケンサービスの代表取締役を務める籠田淳子さんだ。自らも一級建築士の資格をもつ籠田さんは、女性中心の建築家チームを率いながら、店舗や住宅づくり、女性視点を生かした工務店のサポートなど、さまざまなお仕事活動を展開している。

務店は、籠田さんの父親である櫛本春夫氏が一九六二（昭和37）年に創業した（櫛本は籠田さんの旧姓）。六五（昭和40）年には有限会社櫛本工務店（85年にハゼモト建設株式会社へ改組）を設立。この年に長女の籠田さんが誕生している。

「父は大工仕事に専念し、経営は母に任せると、『一人三脚で会社を切り盛りしていました』

そんな家庭で育った籠田さんは、幼少時から製図板を使って絵を描くことや、父のいる建築現場に足を運ぶのが大好きな少女だったという。そのため、籠田さんが「建築業界に行きたい」と志望するようになったのは、

は、自然のなりゆきだったかもしだい。だが、長女に「女の子らしさ」を求めていた父親は、その志望を聞いて激怒した。

したのは滋賀県立短期大学の建築学科。その当時、一番安い学費で通える建築学科だった。

カーに入社したのち、デザイン事務所に転職。順調に経験を積んでいった。

そして、籠田さんが一級建築士の資格を取得したことがエポックメークシングな出来事となつた。

「父の態度がとたんに急変したんです。『おまえは資格を取つたんだか



女性建築デザインチーム「JKDT」は、社員のほかフリーの女性建築士・デザイナーなどで構成される<sup>※</sup>

れだけ建築をやるなって言っていたのに……(笑)。反発したい気持ちもありましたが、父母の力になりたい一心で、ハゼモト建設に入社しました」

一七歳の若き「総建築士」しかも、現場監督もこなすという女性である。籠田さんの存在は、北九州を中心とした建築業界で大きな注目を浴びた。数多くの仕事がハゼモト建設に舞い込み、業績は急上昇した。とはいえたが、当時の建築業界は典型的な男社会

である。その「壁」が籠田さんの前に立ちふさがることもあった。大型ビルの新築工事を受注し、毎日三〇～四〇人の大工を率いて現場に立つ「職長」になったときのことだ。最初のあいさつをするため、スーツスカート、ハイヒールというファッショնをまとった籠田さんは、ゼネコン担当者に「……」などと思つていたの？　スカートを着替えて出直しきなさい」と言われた。当時、女性

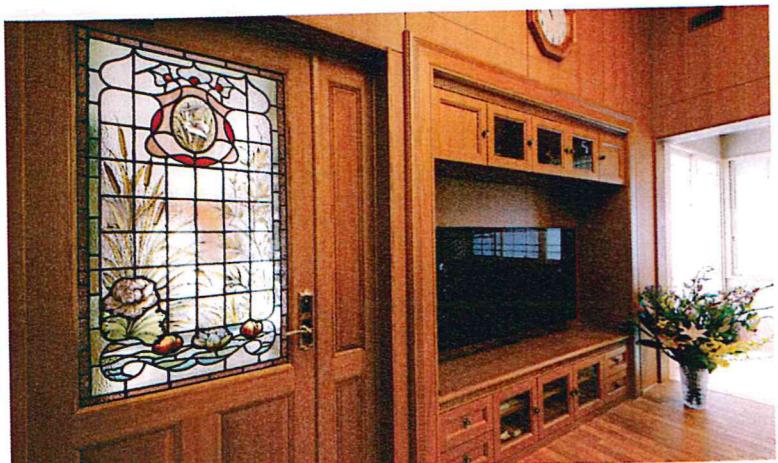
職長を担当するなど前例がなかつた。

現場でも女性蔑視ともとれる言葉をかけられるのは日常茶飯事。鏡田さんはそんな言葉を右から左へ受け流したり、冗談めかして言い返したりと、現場にないむ努力を重ねた。けれど、「女のくせに」「誰かの妻めかけにでもなつ」いればいいなどと言われ、ショックを受けたことも少なくなかつた。

「でも、女性だからこそ助けても、

えたり、褒めてもらったりすること  
も多かつたんです。この現場はきれい  
だね、やっぱり女性だからだね、って  
工事の最後には、現場所長が初めて  
の女性職長として表彰までしてくれ  
下さいました。女性だからつらかったこ  
とより、女性でよかったですという思いの  
方が強いですね」

ある建物の棟上げのとき、父は篠  
田さんにこう言った。「おまえが設計  
したんやから、おまえが餅をまけ」  
（篠田に言つて、棟上げの湯



ゼムケンが手掛けたスイーツショップ「FAVORI」(下2点)と戸建て住宅(上2点)。五感に訴える造りが特徴で、木のぬくもりが伝わってくる<sup>※</sup>

籠田さんの入社によって活況を呈<sup>てい</sup>していたハヤモト建設。父の春夫氏は籠田さんに「建設業をサービス業に広げていける。お前は新しい」と話した。これをきっかけに誕生したのがゼムケンサービスである。創業は一九九三(平成5)年。母の喜代子氏が初代社長を務め、二〇〇〇(同12)年に籠田さんがその後を継いで社長に就任した。設計・デザイン・コンサ

ルティング業務を主力とする企業である。

### 自身の経験から導入した ワークシェアリングが やがてゼムケンの強みに

やがてゼムケンサービスでも、事業の拡大へ向けて社員を雇用することになった。

「最初のころは、月給一〇万円と残業代くらいしか払えないけど、それでも働きたい人はどうぞ」という形でした。当時、私は大学の非常勤講師として設計の講義をしていました。その授業を受けていた学生の中から現場を学びたい人たちが集まり、会社がゼミのような雰囲気になりました」

ワークシェアリングを導入したのは、一〇年前に女性社員の一人が退社したこときっかけだった。その社員の息子が高校受験に失敗し、母親としては仕事に専念できる環境ではなくなつたという。新たに募集をかけたが、「女性社長の会社」と書いたためか、応募者の大半が女性だった。

「最初は、正直、こういう人たちは雇っていませんでした。でも、一人とも優秀な女性だし、私なら子育ての苦勞も、彼女たちの気持ちもわかつてあげられます。もともと私は、娘として・嫁として・妻として・母として・女として、という五つの視点で仕事をしてきました。こうした視点があり、より深い要望も引き出せます。

彼女たちとの五つの視点を共有でできると考えました。そこで「一人に二人で一人分の給料しか払えないけど、それでもいい?」と聞くと、「一人とも『ぜひ働きたい』と答えてくれました」

「一〇年前といえば、まだワークシェアリングがまだない」といふと、まだワークシェアリングがまだない時代でした。

た取り組みによって、一(同23)年に

は、「二回目の「ワークライフバランス市長賞」を企業として受賞している。

さらに、冒頭で触れたように、内閣府の「女性のチャレンジ賞」を受賞しました。受賞式は総理官邸で行なわれ、中学二年生の一人息子・粹君も同席、働く親として感慨もひとしおだつた。

「男性が多数を占める建築業において、『女性力』を会社の強みにしたこと、そしてそれに賛同してくれている女性が集まっていること、などを評価

アーリングという言葉も一般には知られていないなかった時期だ。籠田さんが決断した「女性技術者のワークシェアリング」は地域の注目を集め、〇九(同21)年には北九州市の「ワークライフバランス市長賞」を籠田さん夫妻が受賞した。最初にワークシェアした女性社員の一人は、子育ても一段落し、現在はゼムケンサービスの設計部リーダーとして第一線で活躍している。

父・母・叔母と四人の家族を看取つてきました。結婚して、子どもを育てて、家族を看取ることを建築家として学びました。建築家というのは、自分の人生を大切にしてこそ、お客様に喜ばれる建築物をつくれると思っています。人間は寝ているときも、喜んでいるときも、悲しんでいるときも、常に建築物の中にいます。そういう生活者の視線に立った建築デザインを、この会社から生み出していく

人材育成にも力を入れている。勉強会を開催したこともあつたが、さまざまな形の雇用形態があるため、『勉強会が負担になつて仕事ができない』という苦情もあつた。そのため、籠田さんは「人間力とは」「会社と女性にはさまざまなライフステージが訪れ、それによって働く環境も激変していく。それらにきめ細かく配慮し、柔軟な働き方ができる職場づくりを進めていくのが、同社のワークシェアリングだ。

「最近、介護休暇を取り始めた社員もいます。私自身、二年前に亡くなつた



事務所内の机は椅子を動かせばすぐに会議ができる配置になっている

級建築士の女性は、子どもができて仕事をやめたが、また図面を描きたないと希望していた。ただ、子どもが小さいため、一六時までしか働くことができない。別の女性は大手家電メーカーのショールームでコーディネーターをしていた人だが、こちらも保育所に子どもを預けているため、一七時前に会社を出たいという。

「最初は、まだワークシェアリングがまだない」といふと、まだワークシェアリングがまだない時代でした。

た取り組みによって、一(同23)年に

は、「二回目の「ワークライフバランス市長賞」を企業として受賞している。

さらに、冒頭で触れたように、内閣府の「女性のチャレンジ賞」を受賞しました。受賞式は総理官邸で行なわれ、中学二年生の一人息子・粹君も同席、働く親として感慨もひとしおだつた。

「男性が多数を占める建築業において、『女性力』を会社の強みにしたこと、そしてそれに賛同してくれている女性が集まっていること、などを評価



年に2回ほど社員と業者とそれぞれの家族が集まり、バーベキューをして交流を深めている<sup>\*</sup>

していただいたようです。受賞が決まりましたときは、いろいろなことにチャレンジしてきたなあ、と自分のことながうな人間ではありますけど、女性の感性や思いやりの力で、建築業をもっと活性化していきたい。今回の受賞は、そのお役目をいただいたんだと思って、覚悟を新たにしているところです」

### 女性ならではのきめ細かい対応で、利用者の「内なる声」に耳を傾ける

女性力を活用した建築デザインは、ゼムケンサービスの企業活動にとても大きな武器である。「細やかな配慮やおしゃれなデザイン、家事がしやすい動線づくりや、子育てに適した環境づくりなど、女性ならではのご提案がお客さまから評価しています」と籠田さんは何を心が動くようなデザインを心掛けています」と籠田さんは言う。

消費者視点を大切にしている。その上で、「素材で五感を刺激し、光と陰で心が動くようなデザインを心掛けている」と籠田さんは言う。

三年前からは、「女性建築デザインチーム（JKDT）」の活動を開始している。他社の工務店の女性スタッフや、フリーの女性デザイナーなどが参加する、企業の枠組みを超えた女性プロ集団だ。「級建築士をはじめ、商業建築士、インテリアプランナーなどの資格を持つ女性がネットワークを形成している。こうした仕組みづくりによって売り上げは従来の一倍に増え、一年先まで建築デザインの予定が詰まっている」という人気ぶりだ。

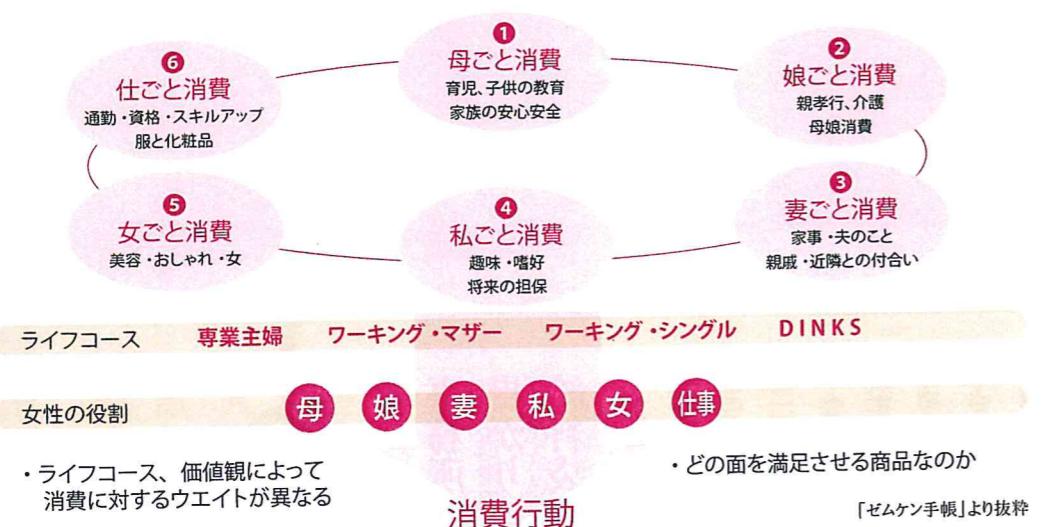
「JKDTは、亡くなつた夫が闘病

### ゼムケンならではの女性視点を活用した空間づくり

#### 女ゴコロをつかむ8つのキーワード

- ①幸せ
  - ・女の幸せ=人とのつながり（愛される、ほめられる）
  - ・自分の幸せを言いたい→口コミになる
  - ・幸せ想像し消費をする
- ②育む
  - ・女はコツコツ育て、成長のプロセスを見るのが好き。プロセスを見ることにより、愛着が生まれる
  - ・店、商品も一緒に育てる関係づくり
- ③選択
  - ・たくさんの中から自分にピッタリを選びたい！
  - ・「選ぶこと」に商品価値がある
  - ・男は結論明快がいい、女は選択肢が欲しい
- ④共感
  - ・女は、喜び・驚き・悲しみ・怒りを人と分かち合いたい
  - ・モノではなくキズナを買う
  - ・憧れの人の“お気に入り”は私の“お気に入り”
- ⑤誠実
  - ・私の家族・身近な人の安心・安全を脅かすものはゆるされない
  - ・目で見える、手で触れるから安心感をもつ
  - ・子どもの為の消費には不可欠
- ⑥特別
  - ・お姫様が私の憧れ。私だけが特別を感じたい
  - ・サプライズに弱い
  - ・特別な出会い方、関係性がモノや店の価値を生み出す
- ⑦ご褒美
  - ・ご褒美という言い訳ができると、とたんに財布の紐が緩む
  - ・モノを買うプロセスもご褒美
  - ・五感を刺激する「癒し」「贅沢さ」がご褒美にふさわしい
- ⑧学ぶ
  - ・女性は学び大好き！自分探し、達成欲、生活を楽しむ
  - ・女性の「学びたい」「高めたい」が消費を生み出す
  - ・「学んだことを教える」

### 多様化、多面化する女性の生き方と消費行動



\* 写真提供：有限会社ゼムケンサービス

かわしま・ろんどう 1964年生まれ。(株)柴田書店で編集者勤務ののち、福岡に拠点を移しフリーライターとして活躍。  
いしばし・ちかゆき 1953年生まれ。写真工房ハネタスタジオ代表。人物写真で高い評価を得ている。

ましたときは、いろいろなことにチャレンジしてきたなあ、と自分のことながうな人間ではありますけど、女性の感性や思いやりの力で、建築業をもっと活性化していきたい。今回の受賞は、そのお役目をいただいたんだと思って、覚悟を新たにしているところです」

た女性デザイナーならではのきめ細かい対応といえるだろう。

北九州市のスイーツショップ「FA VORI」における曲線を生かした空間づくり、「不動産中央情報センター」での利用者が安心して相談できる施設デザインなど、高い評価を受けている建築事例は枚挙にいとまがない。店舗や会社などの設計では、消費者視点を大切にしている。その上で、「素材で五感を刺激し、光と陰で心が動くようなデザインを心掛けている」と籠田さんは言う。

三年前からは、「女性建築デザインチーム（JKDT）」の活動を開始している。他社の工務店の女性スタッフや、フリーの女性デザイナーなどが参加する、企業の枠組みを超えた女性プロ集団だ。「級建築士をはじめ、商業建築士、インテリアプランナーなどの資格を持つ女性がネットワークを形成している。こうした仕組みづくりによって売り上げは従来の一倍に増え、一年先まで建築デザインの予定が詰まっている」という人気ぶりだ。

「JKDTは、亡くなつた夫が闘病

」

「創業者である父の職人への想い、現場への想い、そして何事も想いを形にしてきた父の生き様が、わが社の経営理念「オモイをカタチに」建築は統合芸術」の礎になっています。私たちは、この創業の精神を受け継いで止めて、さらなる飛躍を遂げていかなくてはなりません。その創業者の精神、そして亡き夫の魂を受け継いで、JKDTの発展に全力を注いでいます」



「女性のチャレンジ賞」を受賞した際の盾

中に言つた『淳さん(籠田さん)のこと』のまわりにはたくさん女性建築家やデザイナーが集まってきた

る。女性建築デザインチームをつくるといいんじゃないか』という言葉をきっかけに生まれました』

う一つ、籠田さんの心に残っているのが、不治の病に倒れた父の春夫氏の言葉だった。病床にあった春夫氏は、起き上がれない体でありながら「図面を見ろ！ 車を出せ、現場で職人が待つと」と叫んだ。それが最後の言葉となつた。

「創業者である父の職人への想い、現場への想い、そして何事も想いを形にしてきた父の生き様が、わが社の経営理念「オモイをカタチに」建築は統合芸術」の礎になっています。私たちは、この創業の精神を受け継いで止めて、さらなる飛躍を遂げていかなくてはなりません。その創業者の精神、そして亡き夫の魂を受け継いで、JKDTの発展に全力を注いでいます」

「女性同士、お互いにエールを送ったり、プレゼンテーションの方法をシェアしたり、大きな仕事もつながって取り組んでいく」という集団です。女性視点を設計やデザインに生かして、家づくり・店づくり・まちづくりに、そして幸せづくりをすることでも、母親、子育てが一段落した母親なチームに参加する。

「女性同士、お互いにエールを送ったり、プレゼンテーションの方法をシェアしたり、大きな仕事もつながって取り組んでいく」という集団です。女性視点を設計やデザインに生かして、家づくり・店づくり・まちづくりに、そして幸せづくりをすることでも、母親、子育てが一段落した母親なチームに参加する。

「男たちが築き上げてきた世界に敬意を払い、女性に求められる力を生かす」

インタビューの中で、籠田さんは何

度も「私は大工の娘」と強調した。それが建築家としての籠田さんのバッ克ボーンである。建築という仕事の中で、女性の側に立つてはいるが、その視線は常に現場の男性たち

へも向けられている。職人の世界への敬意といつてもいい。

「やっぱり建築というのは、男たちが築き上げてきた世界なんです。男たちのプライドや、男義、そういうもの

が立つてこそ、本物の現場になる。その中で女性がやつてはいけないことというのがありますから、そこは当社の女性建築士たちにも厳しく指導します。その一方で、女性に求められることをやつしていく形をつくっていきたい」という。「男性と女性のそれぞれの強みを生かして、男女共同で仕事をやつしていく形をつくっていきたい。そうすれば、建築業の可能性ももうと広がっていくでしょう」

今後はゼムケンサービスの中で施

工技術を伝承できる職人集団を育て、JKDTとの連携を推進していく」という。「男性と女性のそれぞれの強みを生かして、男女共同で仕事をやつしていく形をつくっていきたい」として進めという意味で、中学時代の恩師が教えてくれた言葉である。

「女性だからこそ、引っ込んでいたいけない。業界の常識にとらわれず、いいと思ったことには迷わずにつけていく」と、籠田さんは話している。